

第 3 回まちづくり戦略会議

平成 16 年 9 月 6 日 (月)
午後 3 時から午後 5 時
市 役 所 本 館 6 階
第 4 委 員 会 室 に て

司会

本日はご出席をいただきましてありがとうございます。ただいまから第3回まちづくり戦略会議を開催いたします。本日は熊谷委員、長谷川委員からそれぞれご欠席とのご連絡をいただいております。

次に事務局からご確認をさせていただきますが、前回の会議でご要請があった現総合計画の第三次の実施計画及び第1回の議事録の確定分をお送りさせていただきました。なお、第1回の議事録についてはすでに市のホームページのほうで公開しております。

その後、第2回の議事録の原稿をお送りしたところでございます。前回同様お気づきの点がありましたら事務局のほうにお申し出をいただきたいと思っております。

それでは進行につきまして、与田座長よろしく願いいたします。

与田座長

本日の議題は、第3回になりますので、皆様のお手元に行っている事務局案では、今回はこれからの都市と農村の関係、及び都市の活性化ということになっておりますが、先般、第2回の際に防災関係でだいぶ盛り上がりまして、環境重視と資源循環というあたりが不十分なところで終わっておりました。皆様からご意見はちょうだいいたしましたけれども、そこが終わっておりませんので、環境重視と資源循環、並びにこれからの都市と農村との関係というあたり、共通したものも多いかと思っておりますので、本日はこのあたりについてのご意見を皆様からいただきたいと考えております。

都市の活性化については、時間がありましたらそちらに入りますし、皆様のご発言の中でそちらを言われた方は、例えば農村との関係、あるいは資源重視、環境重視というあたりと都市の活性化というあたりを結び付けたいということであれば、ご意見の中に入れてもらってもけっこうです。

それについて皆様から次のようなご意見をいただきたい。どっちみちこの4回、5回くらいまでは総論の段階で、各論に入ったときに、またもっと詳しい中身に入ってまいります。5回か6回以降に各論に入ってまいりますから、本日は皆さんの思っておられる今の環境重視と資源循環、あるいは都市と農村との関係、あるいはそれにベースを置いた活性化について意見があれば出していただき、次のもっと踏み込んだ個別のときに、さらに内容に入っていきたいと思っておりますので、まずイメージとしてどんなことを考え、どんなところを提案したいかということについてご発言をいただきたいと思っております。その皆さんからご意見をいただくに先立ちまして、市長がこられております。

まず市長のほうから今申し上げた議題についてお考えがあれば、まず聞いてから発言をさせていただきます

篠田市長

私は、田園型政令指定都市というものを実現するには、1つの共通基盤と3つの切り口

があるということをずっと申し上げております。

基本的には、かなり広域の都市になって、大都市と田園都市、あるいは周辺の田園地帯、これを快適にスムーズに行き来できる交通基盤というのが大事で、それもマイカーにあんまり過度に依存しない、ある面では環境重視型につながるのかもしれませんが、そういう公共交通の整備なども力点をおいて考えることが1つの基盤として重要であろうと考えています。

3つの切り口ということも申し上げているわけですが、これは、一つは農業者と生活者が互いに恵み合う関係をいかにつくり上げられるかというのがもっとも大きな切り口になるだろうと。

これに成功した都市というのは、私は日本ではほとんど例がないと思っているんですが、78万都市の台所を満たすというのは、相当大変な仕事ですが、それをこの地域の農業者がやるということになれば、逆に可能性も相当ふくらんでくるのではないかと。

ある面では、高付加価値型の農業が可能になるのではないかと思います。

新潟市は、合併をすると日本一の農業産出額を持つ市町村ということになるわけですが、愛知県の知多半島とかあのあたりの農家と比べれば、おそらく、農家の1戸あたりの所得、これは相当差があるだろうと思います。向こうのほうがかなり付加価値のつく農業をやっているのではないかと。そういう面で水田というのは一つの大きな基礎ですが、さらに近郊型の農業をやることによって付加価値をつける。

そして地産地消というような考え方もあるわけで、地域に生産されたものを地域に提供するということが雰囲気的にも受け入れられるようになってきていると思います。

そういう中で農業者が78万都市があってよかったねとか、78万都市があって我々はどうやって生きていけるじゃないかというような、78万都市の恵みを受けるそういう関係をいかにつくり上げられるかが大切です。

それからもう一つは、78万都市住民、生活者ということで多くは括られると思うんですけども、生活者の方たちにとっては日本一の水田面積が広がっているわけで、それだけでゆったり感というか、大都会の人がもっともあこがれているスローライフ、スロータウンみたいなものを新潟の地で味わうことができると考えます。

そういう水田の持つ多面的機能、これを享受するというのも一つですけども、もっと具体的にいえばこの地域で採れる新鮮で安心、安全な食材を使っておいしい料理が快適な環境の中で、安い値段で楽しめる、例えば農業レストランとか、あるいは新鮮な朝採り野菜を並べた朝市とか、そういうものがあることによって、我々はこの農業者がいて、我々はその恵みを受けているということをいろんな場で実感できる、互いが互いの恵みを実感できるような関係をいかにつくれるかというのが非常に重要なんだろうと思います。

2点目は、環境重視です。安心、安全な食材をつくっていただくにはいい環境の中で農業を営んでいただくことが大切です。しかし日本で一番長い信濃川の最下流、阿賀野川の最下流に位置する新潟が自分たちの地域だけで環境重視といっているだけでも、なかなかこれは

よくなりません。そういう面で8月下旬にもやらせていただいた流域連携という中で、信濃川流域、阿賀野川流域、この流域で環境をよくしていくようなそういう呼びかけも含めてやっていく必要があるんじゃないか。

地域の地産地消のレベルを超えて、流域の域を加えて域産域消みたいなことで、例えば阿賀野川ブランド、阿賀ブランドみたいなのができたら、それは環境をよくすることが地域に付加価値を生むということを住民が実感できるということを含めた環境重視型社会を新潟でつくり上げることになると考えます。

もう1つは資源循環型社会、これを新潟でつくりたいと。そのためにはやっぱり今までいろんな農薬、あるいは肥料を使ってやっているわけですけども、これをできるだけ、例えば生ごみから有機肥料を作って、それを農地に還元していくような形とか、あるいは紙ゴミが新潟市の焼却ごみの中で圧倒的に多いわけですので、紙ゴミを燃やさずに分別収集をオフィスでもやってもらって、それを再生紙の原料にしていくというような形にすれば、相当焼却ごみを減らせるだろうと思います。

そういう中で資源循環型社会というのをつくっていく、それと、環境重視が結びつけば環境ビジネスというようなものにも、新潟は可能性を見い出せるのではないかと。

ある面では大量生産、大量消費、大量廃棄というそういう生活システム、ライフスタイルからの決別と。あるいはあまり過度のマイカー依存から若干変えていこうと。そんな形で最終的には田園型政令指定都市のライフスタイルみたいなもの、これに裏打ちされた生き方といいますか、これから新潟政令市の生き方というものが、そういうものに裏打ちされてないといけないんじゃないか。そういう面で3つの切り口というのは最低限必要かなと考えています。

与田座長

今、市長のほうから出た、田園型政令指定都市のライフスタイルと、そのための裏打ちする道具はどんなものがあるんだろうなということです。

今、市長が言われたことを参考にしても結構ですし、それに対する補強でも結構ですし、全く違う視点でももちろん結構であります。この田園型政令指定都市のライフスタイルについてこういう部分、今市長がこういうことを言われたけれどもここは違う、ここは抜けているだろう、こういう見方もあるだろう。

皆様からこれについて忌憚ないご意見をいただいきたいと思っておりますけれども、議論の時間が少ないということで、まず1時間、前半で皆さんからご意見を自由に述べていただき、次にこちらに農業関係、バイオ関係、環境関係の方が3人並んでおります。

まず皆さんの自由な意見を聞いた上で、次の後半に専門家からご意見をいただき、その意見を聞いた上で、議論をしていきたい、こういう形で座長は考えていました。

これがうまくいけばこのままいきますし、うまくいかなければ来月からまた変えます。とりあえずそういう形で素人側から、西條委員からまいりましょう。

西條委員

ほとんど素人なので市長のご意見に追従するところが多いんですが、先般一番最後に都市と農村の関係という、都市に住んでいる住民として子供を連れて郊外のほうに行くところでも都市住民は自分が大事なものをないものねだりをしているという発言をしたんですが、非常に短絡的な発言だと思って取り消しをしたいなと思っています。

どうしてかという、新潟市も今まで合併とか繰り返してきた町ですね。私は旧町名が正しいかどうかわからないんですが、以前坂井輪村で生まれ育って新通村で学校を送った子供だったんですが、当時、私が子供のころは昭和40年代なんですが、坂井輪地区というのは畑とか田んぼのほうが多いくらいで、新通地区にいたってはずっと田んぼで、それこそ純農村みたいな環境でした。

一体私自身都市と農村をどこで区切るのかというのがよくわからないので、例えば新潟市といってもここら辺は都市かもしれないけれども、地方には農村部もあります。

子供のころ、自分はいわゆる純農村の風景の中で過ごしていたんだけど、全然それを特別だと思ってなかったですし、祖父母が古町におりましたから古町と新通とは全然違うということがわかったんだけど、だからといって別にどうしたこともなかった。たぶん家の親たちも違って当たり前と思っていた、前日も言ったように特別な関係じゃなかったと思うんです。

ただ子供のころにたまに古町に行くとき非常にわくわくするというのがあって、特に都市と農村とは環境が違うから何かが違うとか、特に意識する必要もないのかもしれないけど、わくわくするというのは大事ななと今でも思っています。

なんで当時子供の私が古町へ行くときわくわくするのかといたら、全然違うから楽しかったし、あと今は全然違いますけれども、昔は例えば寺尾とか新通とか坂井輪から古町へ行くとおしゃれをしていった。だから気構えからして全然違っていたし、逆に街のほうから山登りに行こうと思うと、夏の暑いときは長袖、長ズボンでも蚊がいるからとか、いろいろなことをやってきましたよね。

要はある程度こちらから歩み寄るといったらいいのか、それは街の人間が田舎に行く場合もあるし、田舎のほうから街に来る場合もあると思うんだけど、違いを認めてお互いに敬意を表すというんですか、違うんだからこっちからそれに合わせていかなきゃいけないというふうなものがあったから楽しかったのかなと思うんです。

都市と農村をどこで区切るのかわかってないので説得力もないんですが、やっぱり合併をしていかにも街という部分もあれば、いかにも農村というところもあるし、中間点もあると思うんですが、お互いに地域地域がこっちから歩み寄りましょうとか、違いを認めて尊重しましょう、その辺がもしベースになかったらやっぱりうまくないのかなと思っています。

さっき互惠、お互いに恵み合うというご発言があったんですが、私もそのとおりだなと思っています。だから全く違うんだからお互い気を使う必要はないんだけど、違いを

認めていいところを伸ばしていきたい。先ほど市長のほうから生ごみを再生肥料化をして農家の方などに使っていただいたらどうかという話がありましたけれども、それもそうだし、あとは素人の個人的な発言としてはぜひ新潟市内の舗装にも土とか木とか自然素材を生かしてほしいと思っています。

というのは環境にもかかわってくると思うんですけれども、コンクリートとかアスファルトがすごく多いから新潟はすごく暑いんですね。それは跳ね返りがすごく多くて夏は暑いから、エアコンを東京じゃなくても使ってしまって、二酸化炭素も排出していると。でもそれがもしアスファルトを敷き詰めるんじゃなくて、昔のように土の部分とかもっと多かったらいいんじゃないか。土とか木の部分、できれば周りの市町村廃材とか間伐材なんかを使うようなことをしていてもいいんじゃないかと思っています。

今から全部それをひっぺ返してというわけにはいかないんでしょうけれども、やっぱり子供たちには、今度は教育のところにもいくんですけれども、雨が降ったら水溜りができ、冬になったら凍って、足にやさしいみたいなものがもっとあってもいいと思います。

うちは子供が小さいからなおさらそう思うんです。

今までは新潟市ということで街の部分しかほとんどないようなところだったら、材料を仕入れようと思ってなかなかわざわざ遠くから買ってもらうなければいけないけど、今度大きくなって自然もすごく増えてくるようになったら、自然系のものをもってきて、街をもう少し暮らしていきやすいものに変えていくこともできるんじゃないかなと思っています。

それともう1点なんですけれども、ごみの問題はやっぱりあるわけで、私たちや一般の市民も、それから企業系もごみは原則出したものの責任だといわれていますよね。出したものの責任だというと、やっぱり新潟市だったら企業系のごみがすごく多いんだろうなと思います。分量からしたら。もちろん家庭ごみもたくさんあると思うんですけれども、紙ごみ系は市長もおっしゃったとおり企業系がすごく多いんだと思います。

町内会さんとかそういった事業所の紙や分別のリサイクルに取り組んでいる NPO さんもあると思うんですが、なかなかまだ会員数は増えてないと聞いています。そこら辺はやはり一切 NPO にお任せするのではなく、行政のほうでも事業所に紙の分別を何とかもう少ししっかりしなさいとかあってもいいと思いますし、廃棄物の中に資源などもたぶんあると思います。それを会社の責任だからとみんな企業に全部振ってしまうと、企業もごみの専門家ではないので、たぶん家電なんかだとリサイクル法があるからいいのかもしれませんが、そうではないものに関しては見落としている部分もあるかもしれないから、もうちょっとそういった企業に対する廃棄物とかごみ関係の指導というのを行政側からしていただいたほうがいいのかなという気がしています。

あとは全く家庭人として申し上げるとすれば、生ごみ、これもすごく多いんですけど、やっぱりごみに関しては一般市民の教育というのはすごく大事な部分だと思います。特に私事で恐縮なんですけど、わが家は自動販売機を設置をしています。道路沿いに。舅と姑

が主にやっているんですけれども、そうすると自動販売機のごみ以外に家庭ごみがけっこう出されるんですね。中には赤ちゃんのおむつの使用済みのものがあったりという状態なんです。

以前はそんなにひどくはなかったんだけど、近年、家庭ごみとかを道路の脇に置いていってしまうという人がすごく増えているような気がします。これはたぶん教育の問題とかも関係があって、市のホームページを拝見すると、子供のエコクラブとか子供向けの環境教育とかしていらっしゃると思うんです。問題は若い親が問題かなと思うので、若い親を対象にしたごみ教育とかその辺を練りなおしていただかないと、子供が大人になって親のまねをしてきます。一般の市民とか消費者の側にもごみの教育をしっかりとやっていかない。新潟市が大きくなる前にというか、大きくなるのを機会にやっていただきたい。

そういった一般市民向けの足元からやっていく必要があると思っています。

与田座長

今の話の中でいうと、村上か何かで小学校を木で造る実験をしたことがあったと思うんですが、やっぱりコストが高くなるんですね。

けどもやっぱり木で建物を、例えば小学校など造った方がいいんじゃないかと思う。

そういう教育に関する部分では、市で管理する公共の建物を木で造るとか、ある程度やっていくべきかなと。今のご発言でそんなふうに感じました。

あと最近動販売機、あるいはコンビニの前に全部ごみを捨てていくというのはやはりでございまして、ごみの出す日が決まっているから、それ以外のときはそこへ持っていってしまうんですね。このあたりをこれからどうもっていくかというのは、教育だけで済むかなと。施設もいるかなみたいなことも感じました。

それでは桜内委員をお願いします。

桜内委員

一般生活者としてお聞きしておりましたのが、やはり都市と農村の関係にもなるかと思うんですが、田園型政令指定都市というライフスタイルとしてスローライフ、スロータウン、非常にこれ望ましいことだと思うんですが、やはりバランスというのも必要だろうと思います。

といいますのは、これまでのまさに農村といいますか、新潟市の周辺であった生活の仕方、ライフスタイルとして、おそらく土地というものと非常に結びついて、生まれ育った土地の小学校に行き、中学校に行き、そのまま学校を卒業して新潟の近辺で勤めるというのがるかと思うんですが、私自身そうなんですが、仕事で新潟に転勤でくるような人もいるわけですね。

これから政令市になっていくということは、ある種都市化といいますか、あまりなじみのない人もやってくるわけですし、そういった場合に強固な地縁、地域に密着したコミュ

ニティというもののみで市の行政なりが行われていくとすれば、入り込めない人もどうしても出てきてしまうと思います。

お聞きしていてやっぱりごみの問題にしても、私もいくつか転勤してきたんですが、その中で新潟というのは一番厳しいと思うんです。出せる日も非常に少ないんですね。ほかの都市はもうちょっと日が多くて便利だと思います。

やはりずっとそこに住んでいる人からすれば当たり前かもしれないんですが、そうではない人たちにとってもうちょっと暮らしやすいバランスというのが必要になってくるんじゃないかなと思います。

それはごみの面だけではなく、市長もおっしゃった、今度広域になってくるときの交通の問題もあると思います。私は新潟に赴任してまだ2年半なんですが、車をもっていないんですね。こういう雪国では、みんながクルマを持っているので気になさらない方が多いと思うんですが、公共交通機関が貧弱で、またバス停も行くのが大変です。

雪なんか降っていますと特にそうです。そういう意味で、もうちょっと公共交通機関がきちんとネットワークとして機能するようにして、民間に丸投げするんじゃないかに、市のほうで面倒を見るとか、もっと町の人にも利用するようにできないものかと思っています。

これは、新潟が田園型政令指定都市ということで魅力ある都市になっていって、観光客とか非常に多くなったときにも言えることで、バス以外で観光客が新潟市内を移動できないんですね。

非常にこれ不便でして、観光を目玉にしていくというのであれば、何かしらやりようがあるんじゃないかなと思います。

与田座長

少なくとも軌道系がほしいということですね。

桜内委員

あとバランスということでもう1つ言いますと、農業者が高付加価値型の農業をこれから行っていくべきだと。それはそうなんですけれども、やっぱりそれもいくらで商品として売れるかということによっているわけです。安い値段で、朝市で付加価値があるものなのに安く売るということは、買うほうからすればもちろんこんなありがたいことはないんですが、売るほうからすればそんなのは高付加価値になるわけではないのです。

その辺のバランスというか、新潟市が政令市になっていって、農業以外の部分をどうやってつくっていくのかというのがないと、農業者自体の発展もなかなかないんじゃないかなと思います。

与田座長

政令市になったとき、一時滞在者、テンポラリーの人たちが多くなるだろうと思います。

そういう人たちが溶け込めない、あるいはわかりにくいというシステムについていえば、もう少しわかりやすくしておく必要があるということです。

あるいはバスに関しては、東京のバスは使いにくい。どこを通っているかわからない。

軌道系であればちゃんと路線図がありますからどこへ行くかわかる。バスは路線図を書いてもどこへ行くかわかりにくい。バスを主体にしている新潟市でも、特に政令市になった場合には、大きすぎる上に、バスの目があまりにも細かいから、わかりにくいということはあるかもしれません。このあたりは、さっき市長がおっしゃった公共交通機関の充実の中でも、一つ我々が考えるべき視点かなと思っております。

では次は平沢委員にいきます。

平沢委員

サラリーマンとして過ごした後、どう過ごすかを考えたときに、この田園型の都市に移行するという事は、とても魅力がありました。

今、合併によって田園都市を目指しているということはすばらしいことだと思いますので、なぜ私がそういう魅力的な田園型の都市にしてもらいたいかということをし話したいと思います。

まず消費者運動をしておりますと、消費者が昔よりずっと安全な食べ物、新鮮な食べ物、その土地にできたその土地特有のものをほしがっております。生産者と消費者が隣同士にいるという、今回の新・新潟市はほかの都市にはない地理的には理想の条件を備えております。

生活者が暮らしやすい、住みやすいそういう都市に向けてのいろいろな芽がもう育っているのではないかと思います。

生活者は、安全な新鮮な、そしてその土地のものを食べたい。なぜ土地のものかといいますと、食べ物は生き物ですから生産して刈り取ったらもうそこから腐敗が始まるわけですし、移動するとなると梱包やあるいは輸送などがいろいろ必要になります。

それはすべて地球に負荷がかかるものですし、どんどん腐敗もすすむわけです。

私は、新鮮な野菜がいかに柔らかくあまいかがわかります。しかしアメリカからきたような野菜も新鮮そうに見えますけど、いろいろな薬剤が散布してありますから、一目で硬いのがわかるんですね。まずさはもちろんですけども。

また、消費者が農業者のところに寄せてもらっていますと、農業者が自然に寄り添っていることが分かります。ことしも災害が多いですが、春からえんえんと育ててきたものが一夜にして全部流れてしまう。ナシが全部落ちてしまう。稲が全部倒伏してしまう。その前で呆然としている。こういうところに接し、生産者を知れば知るほど食べ物のありがたさは本当によくわかります。

スーパーは、販売するのに能率が悪いので、規格以外のキュウリやジャガイモは受け取らない。お金がもうからないとみんな切り捨てられてしまう。

農村の人はどうするか。それを捨てるんです。それより方法がないから。

浅間山の噴火によって、キャベツの問題が出ましたが、佐渡で規格外のジャガイモを4貨車分を全部捨てるようになったので、農村の人たちの苦勞を知っている消費者はそれを全部安く買い取って皮をむいて学校給食にしてもらいました。

農村の人にもいいし、私たちも満足感があり、いろいろ考える機会となりました。

またその土地のものを大切にその土地の人が育て、もし災害があった場合にはみんなでそれを支えて高いお金で買う。豊作になったときは農産物をいろんなところで安く広げる。

そういうふうに、食べる人もいろいろな面で協力できると思うんですね。

新市に、生産者と消費者が一緒にいることでコミュニケーションの場が生まれ、市としてもプラスになるように進めて欲しい。

またこの間、横山委員が、政令都市になると、中核市のときよりも農村が切り捨てられるとおっしゃいました。

ですから、政令都市になるのであれば、切り捨てられないための布石をどんどん打って行って、その緑豊かで生産者も消費者も恵みを受けられるようになればいいと思います。

その1つに、私たち消費者はバイオテクノロジーについて本当に関心を持っています。

私たちはごみを厳しく分けました。でもその後、それを価値ある肥料にするまでのことができませんでした。ですけど、もうすぐできるのではないかと期待しています。

バイオマスを収集するには、見ますと今の市場経済ではなかなかペイしない、手間隙がかかるんですね。

しかし個々の家の生ごみというのは非常にたくさんいいごみが出ます。

そういうものを使って、ほとんど肥料が天然の有機肥料で育て、安全を更に加えて、新潟産のブランドを高めることが可能ではないかと思えます。

もし恵みをいただける消費者や生活者が農作物に付加価値を付けることができるなら、勇んでそれをしたいと思う気持ちです。

またもう1つ最後に、新しい新潟市は高齢社会で、政令市の中で2番目に高齢社会だといえます。年を取った人たちも消費者運動をしているのですが、4、5年前に、だんな様が元気で働いたのがある日定年になった。だんな様が常にうちにいるものだから、私たちが活動しにくい、どうしたらいいかというのが問題になりました。

これから毎年毎年健康で、しかもまだ働ける。そして組織で働いていたときのすばらしい技術もいっぱい持っている人がぞくぞくと出るわけです。しかも一方でNPOのような活動も芽生え、期待しています。今ITも盛んになって電子ツールを使えば、ちょっと行政の手があれば元気な高齢者が集まって、里山の手入れ、農作業、花作り等に参加し、市民交流が盛んになると思えます。

そういうことで交流の輪が広がるのではないかと思います。

与田座長

食の安全から始まっています。食の安全という中でフレッシュという、我々は産地に近いからそのフレッシュなのをもらえるじゃないか。

そうしたらそれは高い金を出しても大丈夫だろう。安全とフレッシュをどのくらいのお金で買えるかというのが1つあるんですが、その中に出てきたのが規格外を捨てていくということです。これも近い場所だったらその場で売れるねという。

それを買うというのも田園型政令指定都市の非常にプラスな面だと思います。

規格外のものを売るというのは普通は衣料品はアウトレットと申しますが、簡単にいえば食糧アウトレットができ、そういう朝市があれば非常に面白く、安くて、なおかつ農村の方々の助けになるというのは1つのアイデアだなと思いました。

あと、リサイクルとバイオマスの問題、これは平沢委員の持論になりますが、非常に広く浅く分散しているバイオマスをエネルギー化するというのは非常に難しい。しかしながら今のようにまとまって出るバイオマスもあるじゃないか。これをちゃんと活用すればリサイクルの中できちんとしたエネルギー源になっていくだろうというご意見だと思っております。

そして最後に、もう1つのエネルギーとして高齢者というエネルギーが余っているのではないかと。これをちゃんときれいに活用するのにこの農村と都市の関係の1つのくさびになるだろう。こういうご意見でございます。

横山委員お願いいたします。

横山委員

お手元に発言の要旨を用意しました。質問という形で主に発言したいと思っております。

全部で4つございます。

1番目は田園型政令市のイメージを篠田市長からうかがいましたが、私は新潟市民でありませんので初めてであります。ああ、そういうことを考えておられるのかと思いましたが、これは、私はおかしいと思っております。

少し勉強しました。津村さんという人の文を使いましたが、これは新潟市にだいぶコミットして書かれているものです。政令指定都市に指定する基準というものがあります。

ここで最初に挙げてあるのが人口で、おおむね100万程度となっています。

その次は人口密度、3番目が前回も発言しましたが、第一次産業の従事者の割合が10%以下であるということです。

政令指定都市の基準というのは人の幸福が3つ、上位に並びます。したがって田園型政令指定都市というイメージは、地域の問題として扱っているようにしか思えません。

特に第一次産業をきわめて重要視している。中でも農業でしょう。

議論のテーマとしてこれからの都市と農村の関係という項目があります。

この現代日本において農村性、そこで行なわれている産業は農業で、住んでいる人間は

農民ととらえますから、これをどうとらえるか。

具体的に2の柱で考えてみます。現代日本の農業はどのような状態になっているかといいますと、お配りしてあります国勢調査の結果を主に使っておりますけれども、2000年の調査ですと農民の数は5%。新潟県は7.3%であります。1995年、前回の国勢調査と2000年の調査の間で農民の数というのは減り続けております。

新潟県は全国で3番目の高い比率で減っているんです。一番高いのが富山、石川、福井、滋賀、島根、そして新潟であります。ほとんどが日本海側です。

ということは、現代日本の農業はなりわいとして成立しているのかという問題があるわけですね。私はそのことに関しまして、橋本寿郎さんの『戦後日本の経済』という岩波新書の本を引用しておきました。これをあとで読んでいただきますとわかりますが、一番最後のところで、機械化によって農業が一部の専業経営と都市近郊などの多数の三ちゃん農業になり、上の表に示すようにエネルギー消費型になった。生産されるエネルギーよりも投入エネルギーのほうが大きくなった。

ですから二次産業、ないしは三次産業でかせいだものを一次産業に投入していくということでもあります。

そのことは、一番最後の記事であります。国内生産額の比率、1995年以降、三次産業が大半を占めている。三次産業で稼がないと一次産業にも投入するものがないんです。

そしてもう少し農業について考えてみるとどういうことになるかということ、日本の農業の最大の欠陥は生産性が低いということですね。これは戦後の農地改革で農地解放をして小規模農家をつくったこと、これが1つの要因だといわれています。生産性を無視している。その結果、食糧自給率というものがどんどん下がっている。

ごく最近の食糧自給率、8月7日の新聞に出ましたが、4大紙で一番詳しく毎日新聞の記事をコピーしてきました。今、自給率が40%を割っている。

費目別の自給率で見えますと、コメは95%、野菜が82%と、まあまあであり、あとのものは見ていただくとおわかりのような形になっております。

ところで食糧自給率に関しましては、いざ事があったときに我々日本人が何を食べるかという、食糧安保論というところまで発展する可能性のあるものです。

1982年、英国において139年ぶりに英国は輸入国から輸出国になった。穀物条例という条例を19世紀の始めにつくりまして、ちょっと乱暴な言い方をしますと、かつての食糧制度のようなものであります。それで麦の価格を高くしておいた。国内の農業を一時的に保護したんです。

ただしこれは資本主義が進むにつれましていわゆる産業ブルジョアジーの力が強くなってきて、土地ブルジョアジーの力が弱くなって、自由主義段階になって穀物条例は廃止されますけれども。

こういう形で食糧自給率を問題にして、高めようとした。なにしろ生産性の低い農業でありますから、いかに高めるかという問題、これを日本の農業学者はまず考えている。

それからもう1つは、資本主義化というのは何かというと工業化であります。農業を切り捨てて工業化するのであります。そしてイギリスがパックスブリタニカといわれて世界の資本主義社会の頂点に立っていた時代は、農業国と工業国の間で国際的な分業関係が成立して、世界はそれなりに安定しておりました。

ところがアメリカ合衆国が台頭してきました。アメリカ合衆国というのは大変奇妙な国であります。世界最大の工業国であると同時に農業国であります。したがって両方の商品を日本に押し付けようとして、あるときの大統領は農業代表を連れてきて日本に押し付けようとする。それからあるときは自動車に代表されるような産業のボスを連れてきて日本に押し付けようとする。そういうようなことで、アメリカが資本主義社会の頂点となった1930年代以降、特に45年、第二次大戦終了後には、国際的な分業関係が崩壊している。

もし日本がここで食糧自給率を上げようとしたら、東南アジアの国々との間の国際的分業関係はどうなるんだろうという問題が出てきます。それから生産性の低い農業を維持するということになれば、その維持する金は第何次産業で稼ぐのか。

三次産業で今稼いでいる。三次産業中心の産業政策を展開しないことには、農業保護政策を展開できない。そういうことにならざるを得ません。

そのような状況下で、我々日本人はきわめて具体的にうまく動いております。

農民になっている人はどのぐらいいるかということです。平均は5%前後です。新潟県では7%になっております。そして95年と2000年間の国勢調査で新潟県は23.2%農民の数が減っているわけで、ほぼ4分1減っています。

先ほど申し上げた富山が32.3%、10%ぐらい多く、6番目に農民人口は減少しております。文字どおり定年帰農ということになっております。

年齢別に誰がどのぐらい従事しているか。この図を逆にしてみてください。これ文字どおり摩天楼ですよ。65歳以上の方がそこに入っているわけです。この人たちが5年後にどんどんりハウスしていきますから。支えようにも支える人がいなくなる。こういう状態でありまして、一体農業に何を期待するのか。何を期待できるのか。

そして最初の田園型政令市という、いまだかつてないイメージは大変いいイメージかもしれませんが、この実現可能性ということに関しまして、私は悲観的にならざるを得ない。少なくとも戦後の日本経済の動きというのは、こういう形に収斂した結果というわけです。この歴史を逆転するエネルギーがどこにあるか。

与田座長

伊藤先生がいらっしゃいますので農業のほうは後でやりますが、基本的には日本の農業というものと我々が目指す田園型政令市という新潟市近郊における農業というのはまたちょっと違う部分も切り口としては出てくるんじゃないかと思えますし、今の横山先生の話は定年帰農を推奨せいと。さっきの平沢先生の話と同じような雰囲気でもよろしゅうございますか。もしやるんだったら定年帰農しかない。

横山委員

定年帰農したら生産性の低いものしかできない。可能性のあるものは野菜だけです。ないしはコメですよ。

与田座長

コメは輸入したほうが安いんですよ。

横山委員

戦前は日本はコメの輸入国です。輸入できなくなったから戦争が始まったんです。

与田座長

わかりました。ここで議論をやっていると時間が尽きませんので、とりあえず政令指定都市に戻りまして、今のおはなしについては後で伊藤委員からコメントをいただきたいと思えます。

それでは、大浦委員お願いします。

大浦委員

きょうの会議というのは環境重視と資源循環ということが主ということですが、環境を守るといっても自分が住んでいる土地に誇りが持てるかどうかというのが根底だと思えます。別にどうでもいいと思ったら、環境を守れといっても守る気になかなかない。

そういうふうに考えてみると新潟の人たち、新潟県人もそうかもしれないんですが、なかなか自信をもってここが私の住んでいる土地の魅力ですと言える人が少ないのではないかと思います。これは魅力がないからではなくて、案外そこに気づいてない人が多いのではないかと。

例えば、ここの土地の名物は何ですかと聞かれたときに、何を答えていいかわからない。

実際あるかもしれないが、気づかないというのもあるんですが、一つには名物になりそうなものをみんな捨ててしまってきたんじゃないかと思えます。

例えば野菜1つとってみても、京都に行くとなんとかネギとか何とか蕪とか、土地の名前のついたものはたくさんあります。そこに行かなければ食べられないとか、その土地だからこそおいしいというものがたくさん、たぶん新潟にもあったはずなんですが、私が子供のころ食べたあの野菜がない。例えば細くておいしいナスがあったんだけど、あれほどここを探してもなくなってしまっている。

新潟市は、合併して、多くが農村地域になりますが、農村地区それぞれの場所でこれがおいしいんだ、というものを自分で再発見することが必要なんじゃないでしょうか。

そういったことをしていくことで、外に打って出るような人が出てくるんじゃないでしょうか。今新潟の場合は探せばあるに違いないんですが、なかなか見えてこない。

例えば山形県に行くとうちはこういうのがおいしいですというのがぞろぞろ出てくるわけです。新潟に何がありますかと聞かれて答えるのが非常に難しい。その土地の自慢となる産物は土地が非常に厳しいところといたしますか、物をつくるのに非常に厳しいところほど持っているような気がします。

新潟はこんな豊かで何でもできそうなのに出てこない。それはやはり意識の問題ではないでしょうか。

さっき市長は阿賀ブランドということをおっしゃいましたが、阿賀ブランド、そういうふうに大きな地区でまとめるのは一つです。

でも、各地区でそういうものを持つのも、ものすごく大事だと思います。

それからもう一つは、今までも伝統食を生かして何か商品化するということはたくさん行われていると思うんですが、食べてみるとどれも同じなんですね。違ったはずなのにみんな平均化してしまって、みんな砂糖が入っているとか、みんな同じ調味料が入っていて、袋が違うけど中身はみんな同じになっています。むしろ全然違うものを作る。うちは砂糖を全然入れてないとか、しょっぱいだけとかいうのもいいと思います。

伝統食だったら本当に私たちの曾おじいさん、曾おばあさんが食べていたようなものを作ってみる。その中で何か商品化できるものがないかどうか。それも平均化した味に近づけるんじゃなくて、頑固にそのままの形で残っているようなものを作っていく。つまりみんなに親しんでもらえる、じゃなくて、本当に一部の人が喜ばないかもしれないけど、だけど、私たちはすごくおいしいものだと思う、というのを出していけるような企画が必要なんじゃないかと思います。

それからもう一つは、やはり都市と農村と連携するといっても、農村の人たちがみんな都市のほうを向いているんじゃあうまく連携できないんですね。農村に住んでいる人たちが自分たちのほうを向くような、農村の豊かさというものを見つけていかななくてはいい。それは都市のほうから提案するというのもあると思うんですが、やはりそれぞれ農村なら農村で、その地区ごとに、ほかにはないというものを考える。それから例えば農村のどこかで文化的な催しを毎年毎年開くというようなことも1つだと思います。

その土地に来てもらって、その土地でしか味わえない農村の体験をしてもらう。

私が子供のころは農村は真っ暗で、その真っ暗だというのがすごく楽しかったんですが、今はもう、真っ暗なところなんかなかなかない。そこに住む人にとっては、明るいのがいいんだというのはわかるんですが、例えば、1週間だけは昔に戻して真っ暗にしてみる、というようなことで人を呼べるんじゃないでしょうか。

与田座長

明るいホテルが見えません。

大浦委員

県外から人を呼ぶために今の便利なものを例えば1週間我慢して企画をするということも、積極的な取り組みとして必要じゃないでしょうか。必要なのは積極性だと。

それが、ほかのないものを作るということではないかと思っております。

与田座長

今の話に関連して、宝物探しというのが実はありまして、この前商工会議所で、どういう宝物を我々は持っているんだというのを、厚い冊子にしました。

今のお話でいけば、今度は地域を広げて、宝物探しをもう1回やろうじゃないかということなんです。

もう1つ、大浦先生がおっしゃるのは、宝物づくりもやろうじゃないか。そのためには実は農家の方々、農業者の方々にもマーケティングの勉強をしてもらわなければだめじゃないかということです。そのあたりは、もう一つ工夫だと思います。

コシヒカリだけで食える時代はもう終わったよと。もう一つ新しいブランドづくりを、黒埼茶豆もそうですが、牛肉で言えば、米坂牛とか、昔は松坂牛から始まって今は何しろ村上牛が新潟ではブランド。なんでそうなったか。どう違うのか。農業者がこれからどうやって自分たちのブランドを作っていくか。市長がおっしゃったような、阿賀ブランドというのはちょっと広すぎると思います。さっき一産地一物産とおっしゃいましたが、もう少しこだわりのある部分でつくっていくような、農業者がそれに対して取り組むような場所の設定が今ないと思います。市として用意してあげるとか、そこまで踏み込んだほうがいいかなという気がしています。

篠田市長

今12市町村で地域の魅力探訪ツアーというのをやっています。1回目を岩室村でやって、地域のすばらしい料理を50品ぐらい並べてもらいました。その中で、私はきりあえというのが一番すばらしかった。大根の味噌漬けを刻んだものに、ゆずを刻んだのを加え、ゴマを加えて、地域によっては砂糖を入れたり、あまり入れなかったりするものですが、それはすばらしい。

そういうものは、12市町村にいっぱいあると思うんですよ。それを発掘するのと、それをどうアピールするかというのは、これはまた別の知恵がいて、それは農村でやりなさい、農家でやりなさいといっても無理なんで、それをこっちは知恵を出しましょうということです。特に岩室は温泉があるのでそういうときにぱっと反応して、ぱっと割烹着腕自慢隊というのが出来てやってくれました。岩室には、ちゃんと伝統的な食も含めたものを伝えていきましょうという館まであります。

そういう部分では、12市町村は、我々よりずっと進んだものを持っていると思います。

地域ブランドは地域ブランド、有機ブランドは有機ブランド、これは全然別物ですから、四万十ブランドは四万十流域だからいいので、あれが四万十流域の何々村ですといったっ

て、どこのことだということになってしまいます。

四万十がなければ何も出てこない。我々は阿賀ブランドも目指すし、一村ブランドも目指さなければ。一地域、あるいは一集落ブランドかもしれませんが、そういうのを目指すべきなんだろうと考えています。

あの探訪ツアーでどんないいのが出てくるか、これは非常に楽しみで、それを一堂に会する食の祭典みたいのもぜひやりたい。

与田座長

食のブランドづくりをやる時に、マーケティングの学校とか、あるいはさっきの岩室にあるような施設とかを、新潟市内のまちうちに造るんじゃなくて、場所を少し変えて岩室に造るとか、いや月潟に造るとか、こうやっていくと役割分担ができてくると思います。

いわゆる農業者研修センターみたいな施設自体は、芸術文化会館みたいに真ん中に来るか、真ん中に来るんじゃなくて端っこへ行くか、そういう検討も必要だと思います。

もう1つは、さっきおっしゃった祭りなんかでも、我々が学ぶ部分をたくさん持っているんですね。

前にも申し上げた、月潟村の大道芸人フェスティバルなんかは、2万人からの人を呼ぶんですから。今の新潟まつりを見に来る人はあまりいませんから、やっぱり魅力ある祭りは田舎にある。前にもお話ができたように、子供たちをそこへ合流させて見せる。昔は、白山の船が来るといって、新潟まつりをちゃんと子供たちが沿道で待ってたんですよ。

今は誰も待っている人なんかいません。それを考えると、原点に帰るとおっしゃったさっきの話でいうと、祭りなんかでは、新潟市が学ぶところがたくさんあると思います。

そういうものを発掘してくるのもブランドづくりだと思いますね。

そういう意味では、教えられることはたくさんありますし、機能も分担できる部分はたくさん持っていると思います。

最後に大川委員お願いします。

大川委員

日ごろ思っていることを、健康の視点からになってしまうかもしれませんが、2, 3お話をしたいと思います。

交通体系につきましてはもう申し上げるまでもないわけですが、とにかく健康、医療、福祉という面からすれば、早急に体系をつけていただきたい。そうしないと、新しい市民になった方もやっぱり新潟市になってよかった、という印象が出てこないおそれが多分にあると思いますので、ぜひ実行していただきたいと思います。

それから今の野菜のことがいろいろ出ていますが、確かに新鮮な採れたてのものをいただく大変おいしいわけですね。今特徴がないという話がありましたけれども、おかしいかもしれませんが、本当においしいものがあれば、特徴がないことも誇りになる

ということもあります。また作る人たちも新潟市の方々はけっこうレベルが高いと思うんですよね。よその土地へ行くと、新潟にはおいしいものが多いと私は思うんです。

ですからそこの全国発信をどのようにするかと。その1つとしては、これから5年後ですけれども国体があります。

昔のようにインフラ整備の国体ではないと思いますので、ぜひそこらもちょっと先になりますけれども、利用する手はあるのかなと思います。

与田座長

まちづくり国体ね。インフラ整備をやめてね。

大川委員

ああいう昭和橋とかを造るんじゃなくて。

あともう1つは、市民農園をけっこう中高年の方なさっていますよね。これをいろんな形で利用することが農村部と都市部のつながりになると思います。ちょっと遠いと難しいかもしれませんが、けっこうやっている方が多いし、希望者もいらっしゃるようですから、そこらをぜひ考えたらいいんじゃないかなと思います。それから立場上から申し上げておきたいのは、煙というのがいろいろあると思うんですが、私は日ごろ思っているのは3つの煙。1つは工業関係ですけど、幸い新潟市はそんな工業地帯でもありませんのでこれは問題ないと思います。

2番目は稲わらの煙。これは以前よりはずいぶん減ってきたと思います。最近新聞で煙にまつわる逆の稲わらの利用についての伊藤先生のお話を拝見しました。これからお話いただけると思うんですが、その他に何かいい方法がないかなと思います。

あと3番目がタバコの煙です。これからは敷地内禁煙が非常に厳しくなってくるわけですが、新潟市に降り立ったら非常にきれいな、空気もきれい、あるいは吸殻も少ない、ガムの殻も落ちてない。それで野菜もおいしかったと、そういったようなことがこれからできたらいいかなと。

小さな政府ということはよく言いますが、やはりこれからは健康・福祉都市とか、環境整備都市とか、そういうのが大きな視点になってくるかなと思います。

与田座長

タバコを吸う私としてはノースモーキング宣言の新潟市は非常に辛いものがあります。ぜひ分煙の方向に進めてもらいたいと思います。でも医師の立場からは環境の問題ですから、参考になりました。

国体なんか新しい視点での国体誘致というのは考えるべき時期にきているかもしれません。ハードはもういいからソフトに何とか。

さっき桜内先生がおっしゃるように、一般的な一時的滞在者、あるいは訪問者に対する

やさしいまちづくりみたいなどの視点で、国体なんかをそのリハーサルにさせていただくということはいいいことかもしれません。

これで一とおり、お話しいただきましたので、プロフェッショナルのお三方にお願いします。今、皆さんからもいろんな話が出ましたし、横山先生から農業に対する問題点が出ましたが、基本的には我々としては、政令市となる田園型政令指定都市のライフスタイルとしての特徴をどういうふうにもっていったらいいのかというのがポイントですので、その辺に力点を置いた形で、それぞれのご専門の中から、考えておられることを順番にお話しさせていただきたいと思います。

大熊委員

まず食べ物の話でいくと、私が遠い親戚に送るのはコメと酒と丸ナスと葉ショウガと茶豆とル・レクチェなどを送って、また向こうから送ってもらう。葉ショウガなんていうのは喜ばれますよ。それから丸ナスも喜ばれます。だから、おいしいものはけっこうあるんじゃないかと思います。

それとごみの問題はうちの学生のごみの捨て方が一番ひどいなと思っているんですが、これも教育でいくらしても、ずっと私は言い続けているんですけどもだめですね。それはさっき言った制度もあるんじゃないかと思うんですね。

特に今、朝ごみを捨てていくのは私の当番で、感ずるのはプラスチック類の回収が週1回しかないというのはきついですね。

これは回数の問題もあるし、ああいうごみの捨て方というの、ちょっと研究して、それに対応したやり方が必要かなという気がします。

それともう一つ、ゴミ捨て場そのものを我々はきちんと社会資本として投資してきていないですよ。道路の脇に置きなさいなんて簡単すぎますね。

やっぱり僕はちゃんと囲いを作って、屋根をつけて、ゴミ捨て場をきれいにして、もっと投資していくと変わっていくのかなと感じております。

私は、ずっと水辺の会ということでいろいろやってきています。通船川でゆったり、佐潟でゆったり、中之口川でその地域の人たちと一緒にコンタクトをとりながらゆったりしてきているなかで、田園型政令指定都市という言葉が非常にショッキングに感じたりするのは、都市というのは基本的に匿名の世界であるのに対して、田園には地域共同体みたいなつながりがあることです。

都市の性格と田園の性格をくっつけているから、ちょっと斬新な感じを受けたりするのかなと思いますが、都市の人間は最近匿名性に飽きてきているところがあって、テーマ型共同体といいますか、水辺の会なんてまさにテーマ型共同体で、そこでいろいろ活動することに生きがいを感じるような方々が出てきた。

一方、農村のほうも、さっき横山先生がおっしゃっているように、農業がどんどん捨てられてきていて、地域性をあんまり意識しないで、昔のように天候なんかを気にしないで、

農薬や肥料を使えば農業をやれるようになってきています。

コメのつくり方なんてまさにその典型かもしれませんが、地域共同体である必要がなくなっている所がかなりあるんじゃないかと思います。

農村の人たちもテーマ型共同体みたいなものにかかなり関心が出てきているという感じがします。今、一緒にいろんなイベントをやる、といったようなことを言い始めています。

今までの20世紀型の人間のライフスタイルという意味では、これまでは都市であることがすばらしいことだったわけですが、やっぱりちょっと違ってきているのかなという感じを、そういうことを活動の中で感じます。

そういう意味では農業者と生活者という切り口というよりも、今まで地域共同体的な意識が強かった地域と、匿名性的な感じで生きてきたところが両方歩み寄り形で新しいライフスタイルが出てくるんじゃないのかなという感じを今受けているというところです。

与田座長

そういうチャンスを提供していく必要があるということでしょうかね。

ただ、今おっしゃるように、農業者として、非常に地元根ざした形から少しずつそれが崩壊を始めている。

一方ではいわゆる匿名性の都市から、もう少し目立って自分がやりたいことをやりたい、僕は僕だよということになりつつある。それがお互いに方向としては合ってきているので一体化できるのではないかな。

そこまではわかりましたが、具体化するのに何がいきます。

大熊委員

そういう意味で、僕らはNPOという形でやっているわけですが、行政には、やる気のあるNPOには大いに支援してほしい。

ただそのときに、今まではどっちかという陳情型で補助金をほしいという形でしたが、やっぱりNPOに金出すときは、NPOの持っている意欲みたいなものをきっちり判断する必要があるだろうと思います。

与田座長

そういうふうな形にもっていくべきであろうし、そういうふうなことをこれから市としてもある程度機会を与えていく、みたいなことなんでしょうかね。

大熊委員

佐潟ではそれなりにずっとつき合ってきていますが、昔、あそこはウナギが良かったんですよね。今でもウナギは若干獲れています。それこそ内野は昔はウナギで有名だったんだけれども、今ではウナギがいなくなっているので、ウナギの復活なんていうのは1つテ

ーマになるのかなと思っています。

あと中之口川のほうで、今年はカヌー大会を2回も企画していました。

農村部の人たちも、そういう新しいテーマ型で地域おこしをすることによりかなり積極的です。今は実験的な感じはしますが、私は将来性があるんじゃないかと感じています。

与田座長

NPO というと若い人ばかりみたいな感じがするんですが、高齢者による NPO ができてきて、今のような場所を設定してあげるとけっこういろんなことができてくるかなという気がしますね。

最近、年取った人のコンピューター教室とかあるんですね。触れない人のための。

でも、農業教室というのは聞いたことがない。

やっぱり NPO としての活動の中にも、ちょっと今までと切り口の違った、都市と農業者、生活者を一緒にしたような形のものも計画していくべきなんでしょうね。

後ほど皆さんからご意見をうかがいます。では伊藤委員お願いします。

伊藤委員

ちなみに、ことしの新潟伊勢丹のお中元のナンバーワン商品は茶豆だそうです。ここ何年間かそうなっているらしい。それから茶豆に限らず、えっ、新潟にそんなおいしいのがあるのというのは、例えば桃ですね。これも糖ののったのは本当にうまいですね。ブドウ、これも糖度は17、8度くらいまでいきますから、ナシもありますし。

これから農業というのは一次産業というイメージではなくなってきました。

二次産業であり、三次産業であり、あるいは情報産業でもあらねばならないという、総合産業というイメージですね。

それから売り方なり作り方というものは、本当に食べていただく方の顔を見ながら売り方を考えていくというそういう時代になってきておりますので、街と田園が握手する条件は、農村の側からも整いつつあるのではなかろうかと思えます。

ただそういうおいしいものがあるというけれども、どこへ行ったら買えるのか分からないということで、都市の側の皆さんからは若干不満があります。

古町とか新潟の駅前あたりの空きガレージとか、ふるさと村なんかを大いに活用して、村からも攻めてくるような交流の場、街の中での直売所的なものを作っていくというのも手ではないかと思えます。

また、これまでは都市計画法上市街化区域と調整区域とのせめぎあいがありまして、なかなか商売ができない問題があるんですね。そういった問題をやりやすいような条件づくりができると、より交流が活発になるのかもしれないと思っております。

また、休日に例えば新潟駅あたりから農村部のほうに気軽な気持ちで、援農というか、遊びに行くというか、そんなホリデーワークとしての組織化ができないものか、とかねがね思っています。

この間、市民の人たちと新潟近郊のナシ畑を歩いたりしたんですけれども、市民の人たちが亀田町にナシ畑があるんですかとびっくりしておられました。

ナシ畑を作っている人も労力が足りなくて、後継者もないというナシ園もポツポツあります。さらには区画整理が始まっていきまして、数十年経っているナシ畑が来年から伐採される所もあります。非常に広いところもったいなかったですね。

もっと別の所を区画整理をやればよかったのになと思います。隣の町のことを知らなすぎるんですね。もう少し情報として大いに交流できるようになったらいいと思います。

先ほども出ておりましたように、12市町村、13市町村の力というのがこなすごいんだというのを見せる場をつくる必要があると私も思っています。県レベルで一番すごいのは秋田で、明治以来種苗交換会というのがありまして、1週間ぶち抜きで、しかも秋田市ばかりでなくて秋田県内をまわっていくんですね。そうしますと、人口3万人ぐらいのところに期間中70万人くらい行きます。ものすごいパワーで盛り上がるんですが、気の利いた施設がありませんので、学校とか場所を借ります。ところが学校を1週間休みにしたら教育委員会に怒られますね。ところが、あそこはやるんです。

それは1年間のうち、時間を少しずつ長くしながらトータルとしては時間がロスにならないようにするだろうと思います。ありとあらゆる農産物が一堂に、体育館に所狭しと、校庭にまであふれています。バイヤーも来ます。

秋田市の駅に降りて、タクシーの運転手さんに今年の交換会はどこでやっていますかという、ことしは何々町でやっています。これから行きますかと。そのようなすごさがあります。

それから、きのう・一昨日の夜に、NHKの子供メッセージという番組を見ました。

子供の教育というのはすごく難しいんですね。小学生の子供のなかには、いったんは死ぬけど生き返るだと信じてやまない生徒もいっぱいいるんです。死とはいったいどういうことなのかということもわからない。子供は子供で悩みを抱えて、それがうつうつとして吐き出すところがないというか、いろんな問題を考えさせられましたが、もっとたくましくあらねばならないのかなと思ったりしました。農村部のほうでも子供たちというのは同じなんでしょうね。都会のところと差はない。

田園政令都市とか、食とか言っていますけれども、基本は人なんだと私はつくづく思いました。子供たちのパワーというのをどうやってつけていけばいいか。

今の食の話にしても、生き物の話にしても、命にしても、一体型の政令都市になった時に込められるようなキーワードがほしいなと思っております。

与田座長

今の話の中で農業はもう第一次産業という切り口ではないと。もう総合産業みたいな形で考えていったほうがいいだろうというのが、まず1つのお答だと思います。

非常に面白いと思いますのは、市の条例を変えることによって市場の場所なんかを設定

できていく、こういう発想です。今の中でいえば種苗交換会の話も出ましたし、新潟でいえば花きなんかもありますから、いろんな意味で交換会、種苗交換会みたいなフェスティバル的なもの、あるいはフェスティバルよりもう1つ踏み込んだ実際の取り引きみたいなものは新潟もできるんでしょう。今、ときどきポツポツと屋台があつたりしますし、あるいは、今の本町市場が活着しているかという、なかなか難しい部分がある。

本当にこういう近郊農業なんかをきちっとやっていくためには条例を変えることによって、この通りは何曜日は絶対やるよみたいなことをきちっとやるとか、常設の場所を作ることも必要なということは先ほどの話の中で出てきたと思います。

あるいは市民農園をあるところに設定して、そこには朝必ずバスが必ず出るよとか、そういうのを近郊に作ってしまって、みんなそこで農業を体験する。今の話のように子供たちもそういう体験をしていくと、リアルな体験ができる。

今先生がおっしゃった子供が危ういというのは基本的には体験がすべてバーチャルになってきている時代ですから、リアルな体験部分がないとなると、一番バーチャルなのは都市生活だと思うんですね。

農村の場合には多少リアルな部分が残ってしまっていて、コンピューターとかテレビでもってカブトムシを見なくても実際見れるとか、ホタルも見れるとか、そういうことを考えると今の話の中でいえば、そういう制度とかシステムを都市が積極的に作っていかなければ、体験できるチャンスは生まれてきませんよと。

さっきの秋田の種苗交換会みたいに、やる気でやればできるところは絶対あるんですが、そういうふうに意志が働いていない。秋田の場合だって意思が働いているのではなくて、結局歴史的になってきたからそれをどんどん今やっているということなんでしょうけれども、それにしても学校を休ませて1週間も空けるんだったらシステムがなければできませんからね。

このあたりのことも参考にしながら、農業者が都市へ入り込んでくる、逆に生活者が農業に入りこんでいくみたいな、そういうシステムを作っていく必要があるし、条例の改正なんかも一歩踏み込んでやる必要があるな、ということをお話で感じました。

及川委員

ちょっと話がずれていいですか。この間、つい先日ですけども、あれは津南町と中里村と松之山町の人たちから呼び出されまして、今知事に陳情してきたと。どうしても十日町市と合併したくないと。津南町は独立宣言で自主自立すると決めいて、県も認めているからいいんですが、ものすごい悲壮感があって、どうしてもいやだと。

要するに何がいやかという、取り残されちゃう。我々のところは何もないと。

何もないし取り残されちゃって、本当にどうにもならない村になってしまうと。それが耐えられないということなんです。

そういう話をいろいろしたんですが、結局やはり思ったのは、新潟市という大きな大木

があって、その大木を支えるのは根っこなんですね。

根っこが元気じゃなければ枝も伸びなければ葉っぱも出てこない、ということで、やはりその根っこの部分というのはこの12市町村の集落集落そのものだと思うんです。

ですからそこを活性化して、元気づけて、一緒になって楽しくやって行くには、どうやったらいいんだろうと思います。

今、合併だ、合併だということで根っこを忘れてやしないかと。その本当の根っこの部分というのはやはり集落、本当に山間の小さなところの、そういうところの人たちをまず元気づけるような話し合いが必要です。

じゃあ行政に、何か案を出して持ってこいじゃなくて、集落には、いろいろの文化もあれば、市長がおっしゃった岩室にあったようなものがあるかもしれない。いろんなそういうものをお互いに出して、そこをどうやるかをむしろ集落の人たちが考えていく。

ときによっては、市長も行ってそこで徹底的に討論をして、彼らの意見を聞いて、彼らの自発的なものを出していく。それが田園型の政令都市としての1つの大きな力になって行くのかなと思います。

それから最近、農家レストランって出てきましたね。ある意味では福島県の会津のみやこ地域のそばなんかも農家レストランでしょうが、今伊藤先生がおっしゃったように、市街化調整区域という形であれができない部分が結構あるんですね。

でもそういうところに農家レストランを作る。あるいは地域農産物を置くファーマーズマーケットを市街化調整区域でも認めると。ある面積をもって認めていくことが都市計画審議会でも通ってきているんです。

ですから、市街化調整区域でもいつでもそういう体制ができるんです。

そういう、都市と地域の積極的な結びつきというのは、やはり必要だろうと思います。

だからまず、田園型政令指定都市というものの大きな要素は、やはり最後の根っこの活性化、根っこの元気さじゃないのかなと思っております。

あと、食べ物の方は皆さんたくさんおっしゃいましたので。

もう1つ、環境ということで話を変えます。

やはり基本はゼロエミッションだと思います。ゼロエミッションというと、せいぜい20%のごみ出しを削るのが精いっぱいですよと話をされる方がいらっしゃいますが、そうじゃないと。

ゼロエミッションというのは、出さないじゃなくて、うまく回して、ビジネスにして、それをいかに利益につなげるかということだと思っているんですね。

ですから、そういう仕組みを市全体で組み上げることが必要です。ここの町内会でゼロエミッションしましょう。みんなプラスチックも生ごみも、生ごみは有機堆肥して農家にあげましょう。そうじゃなくて、全体的にそういうシステムをどうやって組んで、そこからビジネスをどうやって起こしていくかという、そういうトータル的なシステム作りが必要です。ある1点だけ見てゼロエミッションだ、あるいはリサイクルだ、というようなこ

とじゃなくて、トータルな視点で取り組まなければいけないと思います。

それに対してどういう方策で資金を出していくかということも含めて、一つひとつじゃなくて全体的にやらなければ、エネルギーの問題も、あるいは今の循環型農業の問題もしっかりしたものになっていかないと思うんですね。

ですから全市を挙げてゼロエミッションにするんだと。そのためにビジネスを起こすんだと。産業を活性化するんだと。

農業も、環境保全型農業としてゼロエミッションというものをベースに、そこへもっていくエネルギーもまた作っていくという、そういう仕組み作りを全体的にしていくこと、それが田園型政令都市というものの1つの大きなカギになるのではないのかと思っております。

細かいことはいろいろありますけれども、基本的にはそういうことです。

与田座長

及川先生がおっしゃるような、地域の根っこを支えるものが何か。

あるいは新潟市が引っ張りあげるんじゃないで、向こうから言ってきてもらわなければだめだということですね。

こっちがみんな押し付ける合併じゃいかんということですね。

もう1つ、ゼロエミッションというもの。例えばハイブリッドカーというのは簡単にいえばゼロエミッションなんです。だけどあの車ってバッテリーを処理するときにもものすごい負荷がかかるんですよ。いわゆる公害問題を起こしちゃうんですね。

先生がおっしゃるのは、それがトータルとして全部回らねばいかんということですから、ここだけゼロエミッションがいいよという話じゃなくて、作るときから捨てる時まで、使うときも合わせてゼロエミッション、というのはかなり難しいと思いますが、それを切り口にすると、田園型政令指定都市のキーワードになるというのが、いわゆるごみの還元についていえば、一つのまとめになりますよね。

先生方のお話に対して皆さんからの質問時間がとれそうですので、今のお話に対してぜひご発言をいただきたいと思います。

あるいはこれはどういうことかなというのはありますか。

平沢委員

結局私はここ10年ぐらいの間に日本人の平均寿命が一度に上がりました。

そうすると、これから人手のないかという現在の経済機構ではペイしない部分でこの田園都市を築いていく部分というのはいっぱいあると思う。そのときのキーパーソンこそ高齢者であると期待しているんです。

生活者としては、文化的なものと結びついた生活の快適さ、職住近接の仕事があると言う事はくらしやすいまちの条件です。

与田座長

だから、今はゼロエミッションなんです。ごみだけじゃなく、人間もゼロエミッションでいこうということです。

簡単にいうと。そのためには、今のところ使い道のない方々の一番たまっているエネルギーを生かそうと、こういう話ですよ。

平沢委員

そうですね。それが犠牲的じゃなくて健康的でもあるし、精神的な癒しも得られるし、

与田座長

今おっしゃったゼロエミッションソサエティであるとか、あるいは農業を機軸にした、農村との関係による環境シティみたいに、都市の活性化と結びつくものはたくさんあると思いますが、それとはまた別に、この新しい都市を活性化するのに何かあるかなということについて、前回と同じように、僕はこう思うというのを一言ずつ皆さんからお聞きして、次回の討論の頭をそこから始めたいと思います。

都市の活性化、つまり田園型政令指定都市となる都市の活性化の材料、もちろん今言われた環境、農村との関係、バイオテクノロジーのほうでも構いませんが、皆さんがどうお考えですか。この辺を一言ずつ皆さんからお聞きしてこの会議を終わりたいと思います。

そして今お聞きすることは次の会議のときにまたそこから始めたいという意味です。

都市の活性化ってどんなイメージでしょうか。

大川委員

先ほども申しましたが、やはり新潟市の合併はよかった。合併した方も、された方もよかったと。

今は、膨大なお金をつぎ込めるような時代ではありませんので、先ほどの交通体系もそうですが、ごく身近なところから大切にしていこう。

電話も025何とかよりは、今すでになってないところもありますね。38 いくらかありますが、全部はなってないと思うんです。

そういったようなこととか、ごく卑近なところも検討しているのかとは思いますが、早急に解決していくようなことをしないと、いくらぼんと投資をしてぱっとよくなると、そういう時代ではないと思います。

与田座長

大浦委員。

大浦委員

新潟市に住んでいますけど、新潟市に住んでいながら、今の新潟市でさえあまりよくわからない。住んでいるといってもやはり根っこがないような気がするんですね。

きちんと生活してないといわれればそれまでなんですが、だけど都市を活性化するためにそこに住んでいる人が少しずつ根を張っていくことがどうしても必要で、それは例えば今の新潟市に住んでいる人が田園地域に行って根を張る、その前にやはり自分が今住んでいるところを、宝さがしではないですけども、どういうふうにしたらもうちょっと魅力的にできるかということを考えていくことが必要だろうと思います。

ちょうど5月の田植えをするころに弥彦の山の上に登ると、平野が全部が海のようになるんですね。あれはすごいなと思いましたけど、この新潟市内に戻ってくると緑が全然ないとか、もっと鬱蒼とした森があればいいのにとか思うけど、新潟というのはなかなか鬱蒼とした森がないわけですね。

例えばここの地域にこういうものがあつたらすごく自慢できるのにと思えるもの、今でも少しずつ増えてきていると思うんですけども、その生活する側からそういうふうに見えるもの。さっきの市場なんていうのはすごくいいと思います。

与田座長

だから食の関係は1つの活性化の原点になりますね。

大浦委員

市場もきれいに整理されたところというのはそれはそれで楽しいんですけど、例えばヨロツパに行って日曜日に市場が開かれて、ある意味では猥雑、

与田座長

あれはある意味つくり上げることができるんですよ。市がやるとすぐ規格があるとかすぐうるさいことを言うから、やっぱり外して、そこを好きにやれと。その代わりに保健所が来てうるさいとかはなしで特区。もう新潟市特区で猥雑なままやると。

大浦委員

猥雑のほうがかえっていいなと思います。

与田座長

そういうものでもって、それがさっきの近郊のものとか関係してきますね。

及川委員

外部から来た人たちが、やはり今気がつくのは、シャッタータウンというか、新潟市内

もシャッターを降ろしている地域が非常に多いということです。

それから周辺の新津なども、すごいですね。そのシャッター街というものを、ある程度変えていかないと、よそから来た人は、この街元気だと誰も思わない。

活性化していない。死んでいると思われる。

じゃあお前たち、早くシャッターを上げて店をやれ、というわけにいかない。

新津市の例ですけれども、結局あの人たち店をやめているわけじゃないんです。みんな行商というか市場に出て、それで市場を回っているほうが効率がいいし、収入があるんだそうです。それでシャッターを開けなくていいんだということです。

与田座長

開けても、客が来ないという。

及川委員

それは、新潟に限らず全国どこでもそうですけれども、テーマ型タウンというものを地域地域で作っていくと言うのも、一つの活性化につながるのかなと思います。

古町もあるテーマを作って何かやるとか。

前から、あそこに大ホールのような、何か大きなものを造ったらどうかと考えています。

テーマ型、テーマタウンというものを造って、元気付けるのも一つの方法かなと。

やはり新しい新潟市となったときに、元気で活気のある街、そういうところを見てもらいたいと思います。

与田座長

やっぱり商店街の活性化というのは大きいですね。

私は古町はずっとダブルデッカー化を推奨してしまして、あれ2階にしてダブルデッキにすると、上と下とで、確実に2つの商売ができるんです。それだけで、ほかの商店街から見に来る人で稼げると。

せっかくアーケードを造るのにダブルデッキにしてないんですよ。アメリカの商店街はすべて、ショッピングセンターはダブルデッキですから、

そういう意味ではダブルで使えるじゃないですか。トリプルで使えるじゃないですか。

そういう発想をしていかないとせっかくの投資効果がないんですね。

また基本的に、東京の街みたいに、各商店街がそれぞれ特徴をもつのがいい。

例えば、これから新津が一緒になりますが、新津には商店街がありますね。そうすると上野で買物をするのと銀座で買物をするのと内容が違っていると、そういう世界になりますよ。

もし軌道系でつながれば。

そうすると、銀座へ行く人と上野へ行く人、あるいは下北沢へ行く人は違うんだ。

だからそれは、それぞれ特徴があるから違うので、距離的にいえば、その範囲というの

は13市町村の範囲ぐらいですよ。そういうものを各商店街が目指すようなことをきちんとやっていくこと自体が、それぞれの商店街がテーマを持っていく、あるいは特徴を持っていくことにつながると思います。

伊藤委員

8月は満月が2回ある大変珍しい月で、ことしの中秋の名月は下旬のようですね。28日29日ころ。この政令指定都市になって、なる前からそうなんですが、一番月見をして見たいというのが、豊栄の語らい亭の場所なんですね。皆さん方行かれたことありますか。

語らい亭は茅葺の家でありまして、その周りがと潟なんですね。

そこに五頭山が見えてくるんですね。そこに昇っている月がきたら。あそこは貸切にしてくれるんですよ。

農村部についてお話しすると、もう少し景観というものにこれから気をつけていったらどうかと思います。

春先から考えますと、例えば五頭山脈の残雪のところを借景にして、例えば菜の花とかレンゲとか、あるいは麦の緑の色とか。かつて亀田郷あたりで三色運動ということ言われた農家の方がおられまして、何ですかといいましたら、土地というのは1年1作だけではなくて、複合経営、とにかくせつかく耕地整理して立派になったんだから、1年1作でなくて3色。菜種をつくる。さらにはレンゲでピンク色に染まります。

それから麦秋の緑とかで3色。稲を植えても緑になります。

そういうのがありますと、子供さん連れとかでお弁当を持ってピクニックに行ったり、写真を撮ったり。それは家族連れならずともテレビのニュースになったり夕刊とか朝刊に飾ってくれるんですね。

こういう13市町村の自慢の風景というのが、これからあるようになればと思います。

与田座長

百名山じゃなくて百景ね。ここならいいよと。例えば、田毎の月を見るなら、ここで全部田毎の月が見れるとか。

伊藤委員

そういうのをやったらどうでしょうかね。

与田座長

鏡の月を見るならここだとか、海の夕日を見るならここだとか、そこへ農業レストランを作ればもうかりますね。その日はも予約で満杯になるかもしれない。つまり見る農村というのも一つの見方ですね。

大熊委員

活性化という意味では、最近ウオーターシャトルの話だとか万代橋の話をしめすと、新潟はすごく元気だねといわれます。そういう意味では、あれも一つの活性化なのかなと思いますが、私が今考えているのは、通船川の貯木場に水上マーケットを作りたい。

船頭を 200 人養成して、船を 100 艘造って、飛行場に着いた人はまずそこを通らせて何かを買わせる。そういうことを 1 つ夢として持っているんですね。

それをやるためには、どうしたらいいかということで、新潟では 65 歳以上の人の多くが船を漕げるんですね。その技を子供に伝えていこうということで、今ささやかなことをはじめているんですが、そういうことが将来できれば一つ活性化になる。

私は水がらみばかりですが、やっぱり新潟の堀を復活することが、将来の活性化に大きくつながるんじゃないかと考えています。景観の話はいずれテーマを作ってください。

与田座長

私も、前からウオーターフロントオーソリティをつくりなさいと言っています。

今までは、港は例えば運輸省、河川は建設省みたいな形で、管理している場所が違うものですから、市としてウオーターフロントオーソリティみたいなものを作って、それがいわゆる水面と水辺をみんな管理し、水辺の使い方を考えていく。

こういうものがないと、まちづくりの中で、水辺に関する基本的なコンセプトが決まっていけないですね。こういうものを作っていただきたいと思っています。

もう一つは、さっきウオーターシャトルの話が出たんですけど、ああいうものをきちんと運営させていくためには、例えば船に関しては新潟市が買い、または作り、その運営を委託するというと絶対ペイするんです。今、栗原道平氏が頑張っているんですけど、一隻 1 億円ぐらいかかって、それは回収するのにすごく時間がかかる。しかし公共のものを作っておいて、管理を委託して使用料をもらうみたいなことにすると、ああいうものができていくんですね。

PFI とか BTO とかそういう考えですけど、今までは、公共が全部作って第三セクターにすぐやっちゃったんですけど、そうじゃなくて運営は民間に任せるみたいな発想になっていくといろんなものができていくと思っていますから、今の水辺も変わっていくんじゃないでしょうか。

横山委員

私はどうもいろいろ統計等を見ていると、皆さん方のように明るい夢を見れない。

なぜかというとなら日本経済全体がだめなんです。

活性化は経済成長がなければ絶対にあり得ない。

与田座長

わかりました。つぎ平沢委員。

平沢委員

合併の全体会議に出させていただいたときに、合併される新潟市以外の皆さんが真剣に討議していましたが、ここでは合併される立場のほうの人のお話はあまりないと思います。さっき及川先生が言われた大木の下の根っこというのは、合併される12市町村の人たちの力が、その一つひとつになるわけですから、そういう人たちとどういうふうに理解しあっていくかだと思います。

新潟市の人が向こうに出向くのが一番いいと思うんですが、向こうから来てもらって、いろいろなところで産物を交換するとかもいいかも知れません。具体例は、次の機会に。

合併される側というのは、ハンディを感じているんじゃないかと思いましたので、そこを平等にもっていきのが旧新潟市の人たちの務めじゃないかという気がします。

それがむしろ活性化につながると思います。

与田座長

なんでもなんでも新潟市でやるなど。もっと分散して役割分担をしてやれば向こうは頑張るといふ。

平沢委員

平等に新潟市民であることを認識させるようなことをしてほしい。

与田座長

今一番合併に認識がないのは新潟市民だと思います。だって関係ないんだもの。

名前も変わらないし。そういう意味では、問題意識が一番欠如している部分だと思いますね。このあたりをどうしていくかも活性化と関係があります。桜内委員お願いします。

桜内委員

2つありまして、活性化ということで私が思うのは人が集まるということが大事だと思うんですね。まず足元からいえば皆さんも商店街の活性化とおっしゃったんですが、大事なのは人が集まるだけじゃなくてご飯がおいしい。非常に大事じゃないかと思うんですね。

新潟の場合、どこへ行ってどう食うのかというのがわかりづらい。

与田座長

いわゆる訪問者として見た場合。

桜内委員

私、こっちに来て2年半ですけども、どこに行ったらうまい飯を食べるのかわからない。結局コンビニ弁当を食べている。コンビニでビール買って、せっかく新潟にいながらコシヒカリも食わずにいます。今まで私けっこう仕事上外国で仕事をするが多かったんですが、

飯がうまくてもう1回行きたいなと思うのはマレーシアとシンガポールなんですね。

華僑の人たちですが中国人がけっこういまして、屋台とかめっちゃめっちゃうまい。

新潟では、そういった屋台とか、ふらっと行って何やっているのかなとのぞきにいくところがほとんどないんです。

与田座長

窓辺でさっと見えるようなところがね。

桜内委員

正直いいまして、古町を歩いてもどこがうまいのかわからないんですね。

せっかくいいネタ、原材料があるのであればそれをもっと食べやすい形で、屋台とかも含めて、場と設けてほしい。

与田座長

いいですね。保健所がうるさいんですって。ああいうのは条例改正してもらおうといいですね。ここで食った場合はあたって文句言わない。そういうのがあっていいんですよ。

桜内委員

そのとおりで、マレーシアなんかいい加減で、どこでおなかを壊したかわからないんですけど、うまいから行くと。うまいものがせっかくあるのであれば、そこへ行けば必ず食べ、かつ人が集まるというところがないと。今、古町へ行っても人が集まってないので、正直言って、どこがうまいのかわからない。それが一つですね。

あと活性化という視点が変わるかもしれないんですが、やっぱり国際競争力というか、人の集め方、別に地元の人が行くだけではなく、観光客も含め、あるいは仕事上で来る外国人も含め、異国の人が集まりやすいところがあればいいなと思います。

与田座長

新潟商工会議所もゲートウエイト言っていますからね。

その割にはどこがゲートかわからないというつらいところもありますが。

西條委員お願いします。

西條委員

今、古町の話が出たので、古町の事情を話したいと思います。古町、本町、東堀、西堀、榎谷小路、中心街の皆さんの勉強会の事務局の仕事をしているんです。

会議に出て議事録を作ったりするんですけど、すごい会議なんですね。まとまらない。商店街というのはすごく大変なんだなというのがよくわかる会議なんです。

万代のほうは新潟交通から出来上がってきたのでいいんだけど、もともと中心街はみんな別々で、古町も分断をされています。でもみんなやっぱり危機感を感じていて、統一の目標は市内外の人を呼べる商店街になりたい。万代に負けないで、もとの中心街の誇りを取り戻したいと思っているんだけど、なにせ動きが取れない。

組織をありすぎてしまって、それは助成金をもらうためとかでいっぱいつくっちゃったせいもあるんだけど、でもみんなそれをわかりながら何とかしたいと思っているんです。でもその組織だけでうまく動けない。

空回りしちゃっていて、思いがあっても実行する組織、部隊が作れないという状態なんです。都市の活性化、人を引き付ける部分というと万代とやっぱり古町です。

中心部2つあったほうがいいと思っていますので、ぜひ活性化という点では既存の組織と、あとは一般市民とか行政も対等に入って行って、本当に街が活性化できる組織なりを作っていくないと、まずいだろうなと思っています。言うだけなら簡単だけど、動く組織がない。ここを何とかしていきたいなと特に感じています。

与田座長

商店街の問題について、今ご指摘があったとおり、結局補助金と助成金漬けなんですね。それがなければ動かないという人がだんだん増えてきちゃった。

悪いことでもないんですけど、いいことじゃない。これからやるいわゆる商店街の活性化についていうと、今おっしゃったように、行政はお金をやるだけじゃなくて自分から入り込んでいかないと実際見えてきません。

だから助成が出て、いわゆる馬ニンジンでやらしていること多いんですが、それは食っちゃったら終わりで活力になっていってないんですね。

西條委員

若い方はそれでまずいと思ってるんだけど、組織ができ上がっていて、それが崩せない。

与田座長

助成金を受け取るための組織なんです。アーケードですか、歩道ですかとやっているんだけど、それが次につながっていかないのは、お金をもらったら終わりなんだよね。

新しい形でいかなければいかんということですね。

西條委員

その手助けがいるんだろうなと思います。

与田座長

国土交通省が今回作った、まちづくり交付金なんかも新しい制度で、ちょっと視点を変えているんですけど、まだまだお金をもらうということで、もう少しやり方とかフォローとかついていかないと商店街は難しいなと個人的には思います。

篠田市長

大熊先生がおっしゃった匿名性とつながりを作っていくという、それを私は非常に大切にしているので、それが田園型政令市と分権型政令市をつなぐ、一つのキーワードだろうと改めて感じました。

どういうところにこれから行政が金を出していくかというところでいうと、今回ごく小規模で公募型補助金をやりましたけど、NPOなど、テーマと意欲、意志をもった共同体に対し、きちっと説明のできる形で、その裏打ちとなる運営資金などを出していきたいとします。

また、商店街活性化については、これまでの商店街振興策というのは、あまり役に立たないということが分かってきているので、もう少しまちなかを活性化するにはどうしたらいいのかを考え、そういう金出し方に変えていかなければだめなんだろうと思います。

そういう面もふくめて、まちなかとそれから農村部、田園部に対して、どういう金出し方をしていくのがいいのかについて、今までの規則、前例に縛られずに考えていく必要があります。

先ほども、条例改正すればいいじゃないかという話もあったし、特区の話もありました。

日本一の農業都市ができるんだから、日本で初めてという施策を大いにやりましょう、あるいはやってくださいということで、北陸地方整備局や北陸農政局などとも一緒に考えていきたいとします。

私どもに言わせれば、農家レストランとかずいぶん無用な規制が多いので、そのあたりも含めて、新潟でまず実験、挑戦をしていただいて、そこから全国へ行くというような形をいつかはぜひやりたいとします。

そのあたりのアイデアもきょうもいただきましたけど、さらにいただければと思っております。

与田座長

予定の時間がまいりました。これで今日の議論は終わりたいと思います。

大変ありがとうございました。